



直方学校事始め

昔の人は教育が受けられなかったと思われがちですが、実は教育は盛んに行われていました。直方でも優秀な人材は、日田の咸宜園や行橋の水裁園で学びました。一方庶民の教育機関として寺子屋がありました。師匠は神官や僧侶が多く、庶民の生活に欠かせない読み、書き、算術の初歩を教えていました。寺子屋は明治5年に学制が公布されるまで続き、小学校の母体となりました。直方の寺子屋を開いた人々を紹介しします。

山名聴説（やまな ちょうせつ）

寺子屋開設≪天保10年（1839）～明治5年（1872）≫

古町にあった聞名院の住職。聴説は明治8年（1875）直方尋常小学校の初代校長となりました。聴説は、教育者というだけでなく、能書家として有名でした。また采霞と号し、俳人としても業績をのこした文化人でした。

水田辰淑（すいた ときよし）

寺子屋開設≪文政2年（1819）～明治5年（1872）≫

頓野の近津神社の神官。

瓜生玄峰（うりゅう げんぼう）

寺子屋開設≪文久元年（1861）～明治5年（1872）≫

雲心寺の僧。

田部瑞穂（たべ みずほ）

寺子屋開設≪安政元年（1854）～明治7年（1874）≫

植木の日吉神社神官。寺子屋「藤廼舎」（ふじのや）を開いていました。

藤廼舎は後に植木小学校となり、田部は初代校長を務めました。

寺子屋とは違い、学問を志す者のための塾も開かれていました。

秦巖（はた いわお）は明治3年、新入村の有志に招かれ私塾「明善覺」（めいぜんかん）を開きました。師を慕い、筑豊中から学生が集まったといわれています。夜雨（やう）と号し、山名聴説など多くの墓碑銘に詩文が刻まれています。

直方あの頃

明治5年～明治10年

小学校が設立された明治5年以降、どんな出来事があったのでしょうか。また、この年になにが流行したのでしょうか。

明治5年(1872年)

12月 太陰暦から太陽暦を採用する詔書がでる
この年、人力車が流行

明治7年(1874年)

12月 直方郵便取扱所を開く
この年、石油ランプが流行、行燈が衰える

明治10年(1877年)

2月 飯塚警察署直方分署を直方町に新設
この年、山高帽子が地方でも着用されはじめる





伊藤常足肖像

「岡縣集」

伊藤常足/編 NL911ク

「伊藤常足翁顕彰録」

伊藤常足翁顕彰百年祭/編

N121ク

「国学者 伊藤常足」

鞍手町教育委員会/編

NL121ク

伊藤常足（いとうつねたり）は安永3年（1774）、現在の鞍手町古門の古物神社の神官の家に生まれました。若くして学問に志し、23歳で福岡藩の儒学者亀井南冥（かめいなんめい）の門人になりました。さらに26歳で国学者青柳種信（あおやぎたねのぶ）に師事しました。

常足の業績として「太宰管内志」の編さんがあります。31歳で発願し、37年の歳月をかけて天保12年（1841）に全82巻を完成させ、藩主に献上しました。「太宰管内志」は貝原益軒の「筑前国続風土記」に続く筑前の地誌として評価されています。また国中の神職や子弟が国学を学ぶための場として、桜井神社神庫学館の開設に関わりました。

一方、伊藤常足は古物神社の神官として、地元で家塾を開いていました。近郊の商家、富農の人々に学問や和歌を教え、時には出張講義もしていました。底井野の小田宅子や植木の阿部峯子も門人として学び、常足の指導の下で「東路日記」「伊勢詣日記」を執筆しています。和歌集「岡縣集」（おかのあがたしゅう）によると門人の数は243人に上り、多くの門人に慕われていたことがわかります。

はじめの一步 ～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。

郷土の歴史や文化に興味をもっていただくきっかけになればと思っています。

今回は、“直方市を知る”の第一弾として、数々の記録を塗りかえ、2011年に引退された直方市が誇る人物「魁皇」についての資料をご紹介します。

『怪力 魁皇博之自伝』 魁皇博之：著 N788ノ

『嫌いなことでも好きになれる。』 魁皇博之：著 N788ノ

『怪力メモリアル 魁皇引退浅香山襲名披露記念』 N788ノ

『大関魁皇像建立の記録』 大関魁皇銅像建立委員会：著 N788ノ

『完全燃焼 大関魁皇 1047 勝の軌跡』 西日本新聞社：編 N788ノ



直方市立図書館

直方市山部 301-1 ユメニティのおがた内

TEL 0949-25-2240 FAX 0949-23-3902

<http://www.yumenity.jp/library/library.htm>